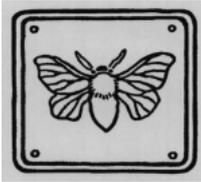


## 競進社 小林升の学び舎

小林升等、養蚕教師たちはどのような技術を伝えたのでしょうか。また、升が学んだ競進社とはどのような組織、学校だったのでしょうか。何故、遠い埼玉まで養蚕の勉強に行かねばならなかったのでしょうか。その答えを探るため、競進社のテキストから競進社の創立者である木村九蔵が推し進めた温暖育という蚕の飼育法を考えてみます。また、升が遺したノートから講義内容をみることで、彼らが情熱を傾けたものに迫ってみたいと思います。



小林升が学んだ競進社(きょうしんしゃ)の設立者・木村九蔵は明治5年に「蚕室内の気候を作為し養蚕を営む方法」を發明、「其蚕法(きさんほう)」と名付け、温暖育(おんだんいく)と称するようになったといえます。

神奈川県央地区では「温暖育」を「火力を適当に使用し、また空気の流通などにも心を配る方法」と捉えていました。

これに対して「高温育(こうおんいく)」とは「宜しく温度を加え、給桑回数を増やし、短日の間に其の結果を見るを利ある」とする方法です。

「高温育」の丹治梅吉(福島県)、天然の気候に任せる「清涼法(せいりょうほう)」の田島弥平(群馬県)の下で学んだ海老名の人・大島正義が明治31年に『清白養蚕新説』を著し、温暖育の理論と実情を記しました。この頃には、温暖育も県央地区で受け入れられてきました。

### 養蚕伝習所・競進社

競進社(埼玉県本庄市)は、明治17年に養蚕改良競進組をもとに木村九蔵(くぞう)が創設した養蚕伝習所。生徒を養成するとともに熟練者を教授員として各地に派遣、改良普及を図っていました。

高山九蔵(上野国縁野郡高山村出身、弘化2年生)は、慶応3年に木村勝五郎の跡を継ぎ、姓を木村と改めました。養蚕書を読み漁り、各地の名家を訪れ、養蚕の改良に努め、明治5年に著書『一派温暖育』で「おしやり病」も防止する「其蚕



法」を発表。その後、蚕種催青器、冬季には蚕種貯蔵器と兼用となる機器なども新案しました。

一方、明治 22 年の内国勸業博覧会で、九蔵が改良した白玉新撰が一等賞を得ます。一時期、この品種が流通の 50%を占めるに至りました。

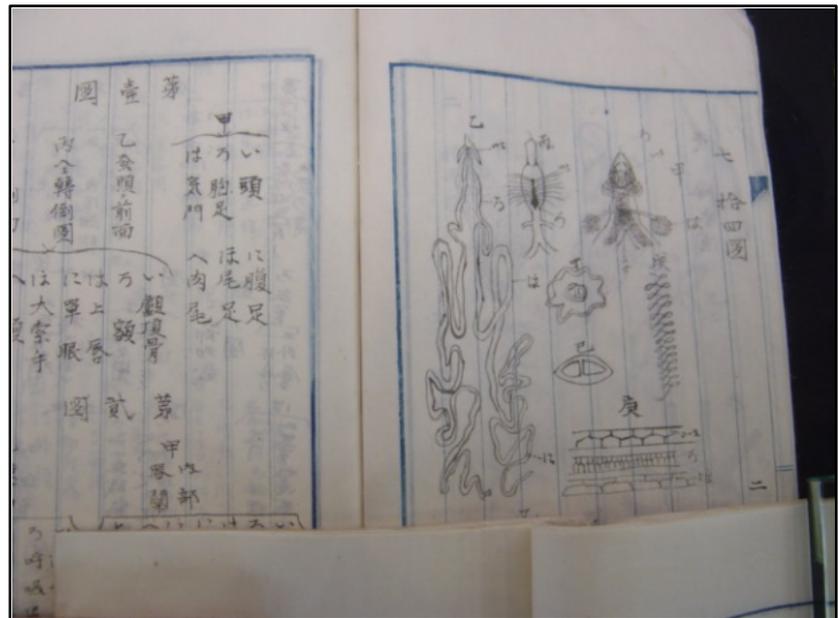
明治 27 年、競進社々員総数は 9,000 名、伝習所の生徒が 570 名、教授員 260 名でした。小林升の名もそこにあります。明治 35 年には、海外にまで広がった社員総数が 21,768 名にもなり、目覚しい発展をみせました。

養蚕伝習所としての競進社については、『大日本蚕糸会報』211 号に、その概要をコンパクトにまとめた記事がでています。創立者・木村九蔵の教育者としての言葉「社員は種を売るな、勉めを売れ、種を売る積もりに勉めを売る覚悟をせよ...」という言葉がについて詳しく記されています。とは云え、商売は商売である。升も入所すぐに蚕種を購入していることが残された手紙から分かっています。

### 小林升が学んだこと

江戸時代の養蚕技術に欠けているものとして、関連科学の未発達による理論的説明の不十分さ、条件の変化に対する技術の適応性の不足があげられていました。

明治 6 年、工部省の佐々木長淳はこの点を補うべく、政府の命令でオースト



リアのゴリッチャ養蚕試験場に送られました。そこで学んだのは、育蚕法、蚕体解剖、顕微鏡使用法、ペブリン病毒検査法等で、帰朝後は内藤新宿試験場で養蚕栽桑、蚕病の調査研究に従事、日本養蚕へと応用しました。なお、タイ養蚕試験場の技手として活躍した永島安太郎の経歴を記した墓碑銘は、佐々木長淳の子・忠次郎の撰になります。

小林升が遺した競進社で学んだテキスト、ノートの数はいくつもありますが「蚕体生理論編次養蚕論」「於競進社顕微鏡室 映瞳薬草集」「蚕病消毒法講義」などをみると、その教育内容は佐々木がオーストリアで修めたものと同じ傾向のもの

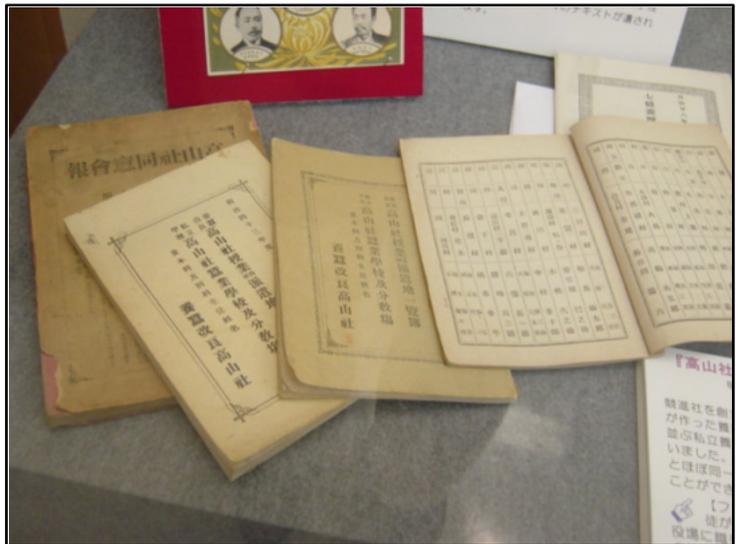
のであることが分かります。また、手書きで模写も行っており、時代が感じられます。

なお、山際の順気社には、佐々木長淳の弟子・松井清三郎が教師として招かれていましたが、西ヶ原養蚕所卒で『星野日記』（厚木市教委で活字化刊行）の著者、順気社々員・星野岩吉も東京の佐々木宅へ訪れ、教えを受けることもあったようです。

### 同時代の養蚕伝習所

政府は、明治 17 年に蚕病試験場を設置、同 29 年に蚕業試験場を蚕業講習所に改めました。また、京都、上田(長野県)にも蚕業教育機関を設けるなど、研究、教育施設は充実、強化されていきます。

また、同時期には競進社(木村九蔵)や養蚕改良高山社(高山長五郎)など、私設



の養蚕団体である養蚕などが順次結成されました。「競進社改良地一覧表」、高山社「授業員派遣地一覧表」などからは、養蚕技術の伝習、養蚕教師の養成、派遣が熱心に行なわれたことがうかがわれます。

『高山社授業員派遣地一覧表』（明治 28 年～）を実際にみてみますと、この派遣地一覧は、競進社のものとほぼ同一フォーマットで、そのことから両社の深い関係を知ることができます。

一方、県立、市町村立の養蚕学校としては、明治 25 年の長野県立小県蚕業学校を嚆矢としますが、各地に簡易農学校、簡易蚕業学校を含む、蚕業学校が多数設立されました。各々の蚕業学校が、独自に作成した多くのテキストが遺されています。

このように、大盛況の養蚕学校ですが、『養蚕新報 126』（1903）には「高山社及び競進社の各社員に告ぐ」という記事が巻頭に掲載されます。これは、蚕業伝習所の生徒が修業後、故郷で蚕業の実務に就かず、学校、役場に職を求める傾向を誡めるものです。そして、その代表格として、高山社、競進社の名があげられているのです。